

異なるタイプの言語の対照から見える普遍性—コリヤーク語と英語の場合

呉人 恵
(富山大学)

1. はじめに

シベリア北東端に暮らすコリヤークは、物質・精神文化や神話などが北米インディアン諸民族と類似していることから、旧大陸から新大陸に移住したのち、再び旧大陸に戻ったシベリアの「アメリカノイド Americanoid」(Jochelson 1928:44) の一派とされてきた。彼らの話すコリヤーク語も、北東アジアのみならず、北米インディアン諸言語とも類似性を有することから、新旧両大陸の「要」「橋渡し」的言語として注目されてきた(渡辺 1992)。

本講演では、系統的にも類型的にも異質なコリヤーク語と英語を対照する。具体的には、まず、コリヤーク語の英語とは異なる類型的特徴として、複統合性、アラインメント、結合価の増減、語順を取り上げ、両言語が複統合的 vs. 孤立的、能格型 vs. 主格対格・中立型、逆受動 vs. 受動、語用論的語順 vs. 統語論的語順など、形態的にも統語的にも対照的な特徴を示すことを見る。

次に、英語と類似した特徴として所有表現を取り上げ、英語の所有格形/of 形とコリヤーク語の 4 つの属格接辞の選択には名詞句階層 (Silverstein 1976) が関わっている点、両言語とも階層の上位・下位では有生性の尺度が、中位では談話的な尺度が働く点で共通していることを論じる。

2. コリヤーク語概観

コリヤーク語は、ロシア連邦カムチャツカ州旧コリヤーク自治管区、ならびにオホーツク海を隔てた大陸のマガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区に分布する。コリヤーク語を話すコリヤークは大きく、トナカイ遊牧に従事する「チャウチュヴァン (cawcavan)」と、海獣猟やサケ・マス漁に従事する「ヌムルウン (nəməlʃən)」に分かれる。本講演で対象とするのは、このうち前者が話すチャウチュヴァン方言である。

コリヤーク語は、チュクチ・カムチャツカ語族に属する。コリヤーク語以外にこの語族に属する言語には、北からチュクチ語 (Chukchi)、ケレク語 (Kerek)、アリュートル語 (Alutor)、イテリメン語 (Itelmen) がある。

コリヤーク語は子供たちが母語として学ばなくなってしまった危機言語である。コリヤーク語を話せる人もほぼ全員ロシア語とのバイリンガルである。最年少の話者が 50-60 代であることを考えると、コリヤーク語は、近い将来、死語となる公算が極めて高い。

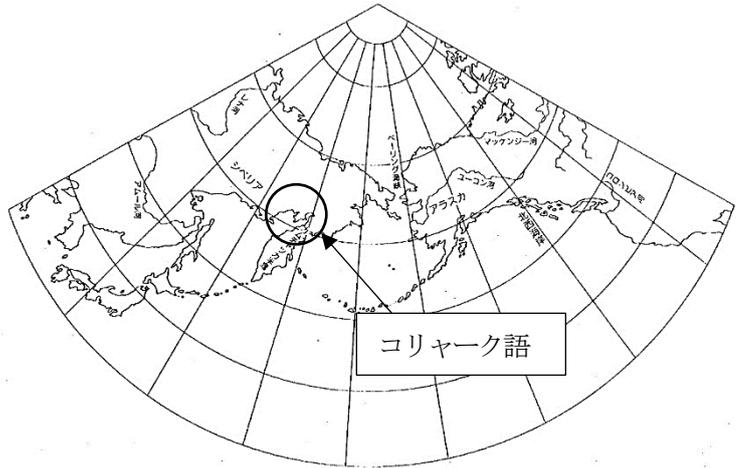


図 1 新旧両大陸の要的语言 (宮岡 1992: 62)

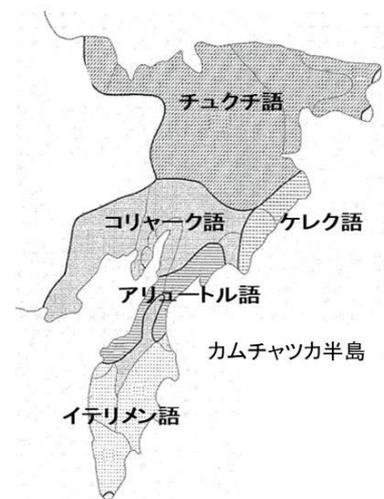


図 2 チュクチ・カムチャツカ語族

3. 英語との相違

3.1. 複統合性

英語が屈折的特徴を失い、孤立語化してきたことはよく知られているが、一方、コリヤーク語は一語の中に多くの形態素を含みうる複統合的言語である。複統合性は、通常、動詞について言われるが、コリヤーク語では、他言語では文に相当するような動詞の一語文 (holophrase) が容易に創出される。このような一語文の創出を可能にしているのは、屈折の面では多人称標示 (主語・直接目的語 or 間接目的語)、派生の面では語彙的接辞、抱合、不連続形態素 (語幹の前後に配置される接周辞) などである (Kurebito 2017, 呉人 2020a)。また、動詞語幹の前後には派生接辞、さらにその外側に屈折接辞が配置され、両者は絡まり合うことがない。すなわち、屈折部分と派生部分が明確に区別され、外側の屈折接辞を剥がしていくと、内側の派生語幹が残る「玉葱の皮型形態法 ('onion skin' morphology) (Fortescue 2013:15) を示す。(1) では定形動詞の構造を示す。イタリックが屈折部分、普通体が派生部分である。

(1) [S/A/O/Inverse][TAM](Valency1)Incorporation(Valency2)stem(Valency3)[Pluralizer][TAM][S/A/O]

(2)(3) は形態素が玉葱の皮型に配置される複統合的な一語文の例である。

(2) *mət-ko-qoja-yijke-lqew-ŋəvo-la-ŋ*

1PL.S-IPF-reindeer-catch-go-HAB-PL-IPF

「私たちはいつもトナカイを捕まえに行っている／た」

(3) *t'-ə-toja-ajyəven'ŋ-ə-qoja-n-omak-av-ə-k*

1SG.S-E-new-evening-E-reindeer-CAUS-gather-CAUS-E-1SG.S

「私はトナカイを晩早うちに集めた」

(2)(3) とともに、文ではなく 1 語である。(2) では、接尾辞 *-lqew* 「～しに行く」が主要部となり、その前にはこれを副詞的に修飾する語彙的接尾辞 *-yijke* 「捕まえる」が付加される。さらに *-yijke* 「捕まえる」の意味上の目的語である名詞語幹 *qoja* 「トナカイ」がその前につく。一方、*-lqew* の後ろには習慣的意味を持つ *-ŋəvo* が後接する。こうして形成された派生動詞語幹を、屈折接辞 *ko...-ŋ* (不完了), *-la* (複数), さらに左端の人称接頭辞 *mət-* (1 複主) が取り囲み、語を完成させている。この一語文には全部で 7 形態素が含まれる。(3) では、主要部である他動詞 *n-omak-av* 「集める」は、使役の *n...-av* と *omak* 「集まる」からなる。この前に目的語に相当する *qoja* 「トナカイ」が抱合されている。さらにその前に「夕方早く」を意味する *toja-ajyəven'ŋ* (*toja* 「新しい」, *ajyəven'ŋ* 「夕方」) が付加された派生語幹を、語頭・語末から人称接周辞 *t'...-k* (1 単主) が取り囲み、語を完成させている。この一語文には全部で 6 形態素が含まれる。

3.2. アラインメント

格標示のアラインメントとしては、一般的に、主格・対格型 (自主=他主/他目), 能格型 (自主=他目/他主), 中立型 (自主=他主=他目), 三立型 (自主/他主/他目), 他動詞文中和型 (自主/他主=他目), 活格型 (自主=他主/自主=他目) が知られている。英語は、2 人称以外の人称代名詞は主格対格型 (e.g. I run/I love you/You love me.), その他は中立型 (e.g. John runs/John loves Mary/Mary loves John.) を示す。一方、コリヤーク語は能格型である。すなわち、自動詞主語と他動詞目的語は絶対格を取り、他動詞主語がこれらとは異なる能格を取る。(4) は自動詞文、(5) は他動詞文の例である。(4) の主語は (5) の主語とではなく、(5) の目的語と同じ絶対格単数を取ることに注意

¹ 語彙的な動詞の意味を表わす接辞のこと (e.g. *-u/-o* 「食べる, 飲む」, *-ŋəjt* 「狩る」, *-ŋta* 「取りに行く」, *-yijke/-yejka* 「捕まえる」, *-yili/-yele* 「探す」, *-jt* 「～に行く」, *-lqiw/-lqew* 「～しに行く」 etc.)。なお、母音が異なる異形態は、母音調和による (呉人 2020c)。

されたい。

- (4) *En'pic-Ø* *jet-ti-Ø*.
 father-ABS.SG come-PF-3SG.S
 「父が来た」
- (5) *En'pici-te* *ʕejjɛw-ni-n-Ø* *kəmiŋ-ə-n*.
 father-INSTR(ERG) call-3SG.A-3SG.O-PF child-E-ABS.SG
 「父は子供を呼んだ」

(5) で、他動詞主語 *en'pici* 「父」は道具格の *-te* を能格として用いている。しかし、すべての名詞が同様なわけではなく、名詞により専用の能格、場所格、道具格が使い分けられる。絶対格が主要格であるのに対して、これらは斜格であることが重要である。3つの格の使い分けには、表1のような名詞句階層 (Silverstein 1976) が関わっている (呉人 2001) (紙幅の関係上、他動詞主語が単数の場合のみを挙げる)。

表1 能格標示における名詞句階層 (他主が単数の場合)

| 能格標識 | <i>-nan</i> (能格) | <i>-ne-k</i> (場所格) | <i>-te/-ta</i> (道具格) | |
|------|------------------|-------------------------|-------------------------|-------------|
| 階層 | A | B | B/C | C |
| 名詞句 | 人称代名詞 | 固有名詞 (人間・動物), 「誰」, 親族呼称 | 人間名詞, 親族名称, 指示代名詞, 「どれ」 | 動物名詞, 無生物名詞 |

階層の高い順から、A, B, B/C, C 階層とする。最上位の A には人称代名詞、B には固有名詞、疑問詞「誰」、親族呼称、C には動物名詞や無生物名詞が該当する。さらに、B としても C としてもふるまう名詞があり、人間名詞、親族名称、指示代名詞、疑問詞「どれ」が該当する。ちなみに、上の (5) は B/C に分類される。

名詞句階層は、Silverstein (1976) がオーストラリア先住民諸語に見られる能格と主格・対格の分布の仕方から着想したものであり、(6) のような階層をなしている。

- (6) 【シルバースティーンの名詞句階層】1 人称代名詞 > 2 人称代名詞 > 3 人称代名詞 > 親族名詞・固有名詞 > 人間名詞 > 動物名詞 > 無生物名詞

細部の違いはあるものの、表1のコリヤーク語の能格標示が示す階層と基本的には共通している。ところで、コリヤーク語では、名詞句階層は能格標示だけではなく格標示全体に及ぶ。後述の所有表現もその例外ではない。

3.3. 結合価の増減

能格構文では、絶対格を取る自動詞主語、他動詞目的語が、焦点として前景化している。これに対して、能格 (斜格) を取る他動詞主語は背景化している。コリヤーク語には、他動詞主語をはじめとする斜格名詞を前景化させるために結合価の増減を起こす手段がある。他動詞主語を絶対格に昇格させ、同時に目的語を削除するか、斜格に降格させるのが逆受動 (antipassive)、付加詞的な斜格名詞を絶対格に昇格させ、目的語化させ項をひとつ増やすのが充相当 (applicative) である。いずれも英語にはない構文である。一方、コリヤーク語には、英語のような受動文はない。他動詞目的語は上述のように絶対格を取って前景化しているため、受動化の必要はないのだと考えられる。

まず、逆受動の例を挙げる。目的語が削除されるか、斜格に降格するかには、被動作性、すなわち、動作が動作対象に及ぶ程度が関わっていると考えられる (呉人 2015)。目的語が削除されるのは、動作が被動作者に及び、変化を引き起こす動詞の場合である。(7a) は被動作性が最も高い「殺す」の他動詞文、(7b) は逆受動化接頭辞 *ena-*, *-al* が

ついた対応する逆受動文の例である。ここでは、目的語 (O) は削除されることに注意されたい。

- (7a) *Kawi-na-k* *təm-ne-n-∅* *qajuju-∅*.
 Kawi-HUM.SG-LOC(ERG) kill-3SG.A-3SG.O-PF newborn.reindeer-ABS.SG
 「カウイが仔トナカイを殺した」【他動詞文】
- (7b) *Kawi-∅* *y-ena-nm-al-len* [∅].
 Kawi-ABS.SG RES-ANTIP-kill-ANTIP-3SG.S
 「カウイは殺した」【逆受動文】

一方、目的語が場所格に降格するのは、動作が対象に及ぶが、変化が起きるかどうかが含意されていない動詞の場合である。(8a) は「集める」による他動詞文、(8b) は逆受動接頭辞 *ine-* がついた対応する逆受動文である。

- (8a) *Ajyæve* *vava-na-k* *ye-jici-linew* *picy-u*.
 yesterday grandma-HUM.SG-LOC (ERG) RES-gather-3PL.O food-ABS.PL
 「おばあちゃんは昨日、食料を集めた」
- (8b) *Ajyæve* *vava-∅* *ye-ine-jici-linew* *picy-ə-k*.
 yesterday grandma-ABS.SG RES-ANTIP-gather-3SG.S food-E-LOC
 「おばあちゃんが昨日、食料を集めた」

次に、充当相の例を見る。充当相は、副次項である斜格名詞を主要項(目的語)に昇格させ、結合価の増加を引き起こす手段である。これにより、動詞は他動詞活用する。コリヤーク語では、受益者名詞、場所格名詞、方向格名詞の充当相化が見られる。ただし、受益者名詞の充当相化が最も一般的である。(9a) は受益者が与格で表されている自動詞文、(9b) は充当相化している他動詞文である。受益者は絶対格に昇格する一方、動作者は能格(場所格)を取って降格し、動詞は他動詞活用している。

- (9a) *ənniw-∅* *yəmk-ə-ŋ* *ənnajet-i-∅*.
 uncle-ABS.SG 1SG-E-DAT fish-PF-3SG.S
 「叔父が私に魚を釣ってきてくれた」
- (9b) *ənniv-ə-ne-k* *yəmmo* *ine-nnajet-i-∅*.
 uncle-E-HUM.SG-LOC(ERG) 1SG.ABS 1SG.O-fish-PF-3SG.A
 「叔父は私に魚を釣ってきてくれた」

3.4. 語順

英語と異なり、コリヤーク語では何が基本語順かを定めるのがきわめて難しい。コリヤーク語の談話・民話テキストである Kurebito (ed.)(2014, 2016, 2017, 2018, 2019) から他動詞平叙文 1,702 例を抽出し、A, O, V の出現と語順を調べたところ、図 3 のようになった。OV と V が同程度の高い出現率を示し、VO, AV と続く。A, O, V が揃っていても文が成立するのは、上述の通り、動詞が多人称標示をすることと無関係ではない。一方、A, O, V がすべて揃っている他動詞文は、全体の 11% に満たない。加えて、A, O, V の配列順序は 6 通りすべて可能である。よって、コリヤーク語の語順は、英語のような統語的な語順ではなく、語用論的要因により決定づけられる語順であると考えざるをえない。

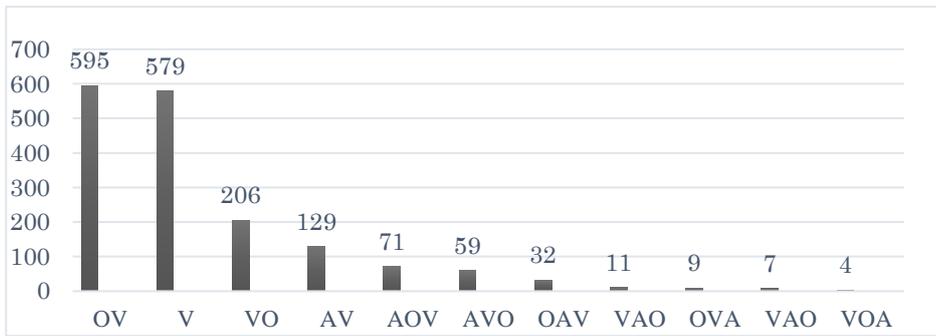


図 3 コリヤーク語テキストにおける A, O, V の出現と語順

4. 英語との類似：所有表現

4.1. 名詞句階層による所有表現の使い分け

以上見たように、コリヤーク語は類型的にも英語とは大きくかけ離れた言語である。しかし、その一方で、顕著な類似点を見出すこともできる。本講演では、所有表現²に着目する。英語では所有関係は、所有格形 (10a) と of 形 (10b) の 2 種類により表わされる。

(10a) *Mary's house*

(10b) *the wall of the house*

一方、コリヤーク語では所有関係を表わすのに、*-nin*, *-nən*, *-in/-en*, *-kin/-ken* (いずれも語末形) という 4 種類の属格接辞が使い分けられる。この使い分けにも、表 2 のような名詞句階層が関わっている (呉人 2020b)。無生物名詞のうち、時空間を表わす名詞がひとつの階層 D をなし名詞句階層の最下位に位置するために、能格標示よりも階層がひとつ増えている。

表 2 所有形式に見る所有者 (単数) の階層

| 属格接辞 | A | B | B/C | C | D |
|------|-------------|---------------------|---------------------|-----------------|------------------|
| | <i>-nin</i> | <i>-nən</i> | <i>-nən~-in/-en</i> | <i>-in/-en</i> | <i>-kin/-ken</i> |
| 名詞句 | 人称代名詞 | 固有名詞・親族呼称・「誰」・指示代名詞 | 人間名詞 | 親族名称・動物名詞・無生物名詞 | 無生物名詞 (時空間) |

A の *-nin* は人称代名詞, B の *-nən* は固有名詞, 親族呼称, 「誰」, 指示代名詞, C の *-in/-en* は親族名称, 動物名詞, 無生物名詞, D の *-kin/-ken* は時空間を表わす無生物名詞につく。さらに, 人間名詞は, B, C どちらの接辞も取ることができる。(11a) は A の接辞を取る 1 人称単数の人称代名詞, (11b) は B の接辞を取る親族呼称, (11c) は B, C のいずれの接辞も取ることができる人間名詞, (11d) は C の接辞を取る親族名称, (11e) は D の接辞を取る場所を表わす無生物名詞の例である。

(11a) *ɣəm-nin jaja-ŋa*
1S-GEN house-ABS.SG 「私の家」

(11b) *appa-nən ujetik-Ø*
daddy-GEN sledge-ABS.SG 「父さんの橇」

(11c) *el'ʕa-nən ~ el'ʕ-en kojŋ-ə-n*

² 必ずしも常に所有関係を表わすわけではないが、ここでは便宜的に「所有」と呼ぶことにする。

| | | | | |
|-------|------------------|-----------------|--------------|---------|
| | woman-GEN | woman-GEN | cup-E-ABS.SG | 「女のコップ」 |
| (11d) | <i>en'pic-in</i> | <i>ujetik-∅</i> | | |
| | father-GEN | sledge-ABS.SG | | 「父の橇」 |
| (11e) | <i>jaja-ken</i> | <i>tallatal</i> | | |
| | house-GEN | door (ABS.SG) | | 「家の戸口」 |

ところで、このような名詞句階層は一体、どのような尺度によって成り立っているのだろうか？名詞句階層は、‘Animacy hierarchy’ (Comrie 1979:322) とも呼ばれるように、有生性が関わっているとされてきた。コリヤーク語でも、人称代名詞が最も階層が高く、無生物名詞が最も階層の低いことから、有生から無生へと階層化していることがうかがえる。ただし、(11c) のように B 接辞も C 接辞も取ることができる人間名詞の場合には、有生性とは異なる尺度が働いていると考えなければならない。(12a)(12b) は、それを探る手掛かりとなる例である。所有者である *tumy* 「友人」という人間名詞は、(12a) では B の *-nən* を取り、(12b) では C の *-in* を取っている。

(12a) 【私は、友だちのジュカ、ジャクジェント、コッテと一緒に犬橇に初めて乗ったという話をしている】

Jatan yəm-ə-k tumy-ə-nən en'pic-in ko-tva-ŋ
 only 1S-E-LOC friend-E-GEN father-GEN IPF-be-IPF
janot yakanje.
 first dog.sledge (ABS.SG)

「はじめ、私の友だちのお父さんにだけ犬橇があった」

(12b) 【隣家でろうそく用に使っている豚の脂を欲しがっている私に対して、母親が】

Unekem tumy-in ejek n-ə-nu-ni-n.
 seemingly friend-GEN candle (ABS.SG) OPT-E-eat-3SG.A-3SG.O

「(この子は) どうやらよその蝋燭を食べようとしているのね」

(12a) では、「友だち」が「ジュカ、ジャクジェント、コッテ」であることはすでに言及されており、旧情報である。したがって、特定性・指示性が高いと考えられる。一方、(12b) では、隣家のことを指してはいるものの、特定の誰かを想定しているわけではない。この場合の *tumy* は、「よその」くらいに訳すのが適切である。したがって、(12b) は (12a) に比べると、特定性・指示性が低い。

以上から、コリヤーク語の属格標示に見られる名詞句階層においては、階層の上位・下位では有生性の尺度が、中位では特定性という談話的尺度が働いていると考えられる。

4.2. 英語との対照

4.2.1. 階層化の類似性

藤川 (2020) によれば、Deane (1987) は英語の所有格形/of 形の選択に基本的に名詞句階層が関わっているとす。Deane (1987) が示した名詞句階層は (13) の通りである。

- (13) 1st person pronoun > 2nd person pronoun > 3rd person anaphor > 3rd person demonstrative >
 Proper name > Kin-Term > Human and animate NP > Concrete object > Container > Location >
 Perceivable > Abstract (Deane 1987:67)

階層の上位の名詞が所有者になる場合には所有形の容認度が高く、of 形の容認度が低い。一方、階層の下位の名詞が所有者になる場合には所有格形の容認度が低く、of 形の容認度が高い。人称代名詞から無生物名詞へと階層化

している点で、コリヤーク語とおおよそ類似している。ただし、相違点もある。まず、人称代名詞は、英語では1人称>2人称>3人称と階層化しているのに対し、コリヤーク語では区別がない。指示詞、固有名詞、親族名詞（親族呼称・親族名称）も英語では階層化しているが、コリヤーク語では親族名称以外は同じB階層に分類される。人間名詞は、英語では有生名詞として一括りにされているのに対し、コリヤーク語では動物名詞は無生物名詞とともにC階層、人間名詞はB/C階層と別個に分類されているなどである。

4.2.2. 尺度の類似性

コリヤーク語では上述の通り、階層の上位と下位では有生性が尺度となっている一方、中位では特定性という談話的要因が尺度となっていることを見た。一方、英語について、藤川 (2020) は、Rosenbach (2008) が、英語の所有格形/of 形の選択には ①有生性の尺度:人間>有生物>無生物と②指示性/定性の尺度:代名詞>固有名詞>定>不定>不特定という2つの尺度が独立して働いているとしていることを受け、一般化を試みている (14) (図 4)。

(14) 英語の所有格形/of 形の選択に関して、

- a. 有生性は名詞句階層の高い位置と低い位置で優位に働く。
- b. 談話的要因は名詞句階層の中心に進むにつれて、その影響の度合いが大きくなる。(藤川 2020:25-26)

| | |
|-------|----------------------------------|
| 階層 | 人称 > 固有 > 親族 > 人間・有生 > 具体物 > 抽象物 |
| 所有表現 | ←———— 所有格形 ————— of 形 —————→ |
| 有生性 | ←————— —————→ |
| 談話的要因 | —————→ —————← |

図 4 英語の階層における尺度の反映の度合い (藤川 2020:25)

すなわち、階層の上位では所有格形、下位ではof 形が有生性により相補的に分布しているが、中位では両形は併存し、談話的要因によって使い分けられている。具体的には所有者が階層中位に近いほど、主要部名詞がフォーカスである場合には所有格形が、所有者がフォーカスである場合には of 形が選択される。(15a) と (15b) を比較されたい。

(15a) The speaker said that, among the global problems that face us now, *the chief one is the world's economy*. [economy is in focus]

(15b) He went on to say, however, that in order to succeed we must first tackle *the economy of the industrialized nations*, which is the basis for *the sound economy of the world*. [world is in focus]
(Quirk et al. 1985: 1282)

所有形式の使い分けは、名詞句階層を基盤としつつ、階層の上位・下位と中位では異なる要因に影響されるとする藤川 (2020) の一般化がコリヤーク語の4種類の属格接辞の使い分けにも当てはまることは、上述の通りである。

5. おわりに

本発表では、コリヤーク語が英語と典型的にきわめて対極的な特徴を示す一方で、所有表現においては、名詞句階層を基盤としつつ、名詞がどの階層にあるかにより、有生性と談話的要因を使い分けしている点で類似していることを見た。典型的にも系統的にも異なる言語同士の所有表現におけるこのような顕著な類似性は、言語に名詞句を認知的際立ちによって秩序づけるといった普遍的な傾向を反映していると言えるかもしれない。

【略語】 A=agent-like argument (transitive subject), ABS=absolutive, ANTIP=antipassive, CAUS=causative, DAT=dative, E=epenthetic, ERG=ergative, GEN=genitive, HAB=habitual, HUM=human, INSTR=instrumental, IPF=imperfect, LOC=locative, O=object, OPT=optative, PF=perfect, PL=plural, RES=resultative, S=single argument (intransitive subject), SG=singular

【参考文献】

- Comrie, B. (1979) The Animacy Hierarchy in Chukchee. In: P. R. Clyne, W. F. Hanks, and C. L. Hofbauer (eds.) *The Elements: A Parasession on Linguistic Units and Levels, Including Papers from the Conference on Non-Slavic Languages of the USSR*, 322–329. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Deane, P. (1987) English Possessives, Topicality, and the Silverstein Hierarchy. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 13: 65-76.
- Fortescue, M. (2013) Polysynthesis in the Arctic/Sub-Arctic: How Recent Is It? In: B. Bicke, L.A. Grenoble, D.A. Peterson, and A. Timberlake (eds.) *Language Typology and Historical Contingency. Festschrift for Johanna Nichols*, 241-264. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins (Typological Studies in Language 104).
- 藤川勝也 (2020) 「英語の所有表現に見られる名詞句階層」 富山大学人文学部編『富山大学人文学部叢書Ⅲ人文知のカレイドスコープ』, 15-27. 富山: 桂書房.
- Jochelson, Waldemar (1928) *Peoples of Asiatic Russia*. New York: American Museum of Natural History.
- 呉人恵 (2001) 「コリヤーク語の名詞句階層と格・数標示」『アジア・アフリカ言語文化研究』62: 107-125.
- 呉人恵 (2015) 「コリヤーク語の S=A 交替における格枠組みと被動作性」 パルデシ, プラシヤント・桐生和幸・ナロツク, ハイコ (編)『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』, 75-89. 東京: くろしお出版.
- 呉人恵 (2020a) 「コリヤーク語の複統合性再考: その「新しさ」と人称スロットの特異性をめぐって」『北方言語研究』10: 41-59.
- 呉人恵 (2020b) 「コリヤーク語の所有表現と名詞句階層—英語との共通性に着目して」 富山大学人文学部編『富山大学人文学部叢書Ⅲ人文知のカレイドスコープ』, 28-40. 富山: 桂書房.
- 呉人恵 (2020c) 「コリヤーク語チャウチュヴァン方言における 3 系列の母音調和」『アジア・アフリカ言語文化研究』100:5-24.
- Kurebito, M. (2017) Koryak. In: M. Fortescue, M. Mithun, and N. Evans (eds.) *The Oxford Handbook of Polysynthesis*, 832-850. Oxford: Oxford University Press.
- Kurebito, M. ed. (2014) *Koryak Text 1*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. ed. (2016) *Koryak Text 2*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. ed. (2017) *Koryak Text 3*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. ed. (2018) *Koryak Text 4*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. ed. (2019) *Koryak Text 5*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London/New York: Longman.
- Rosenbach, A. (1985) Animacy and grammatical variation—Findings from English genitive variation. *Lingua* 118: 151-171
- Silverstein, M. (1976) Hierarchy of Features and Ergativity. In: R.M.W Dixon (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112-171. Canberra: Australian National University.
- 渡辺己 (1992) 「新旧両大陸の要: チュクチ・カムチャツカ語族」 宮岡伯人編『北の言語: 類型と歴史』, 147-177. 東京: 三省堂